

よみがえった清流のシンボル

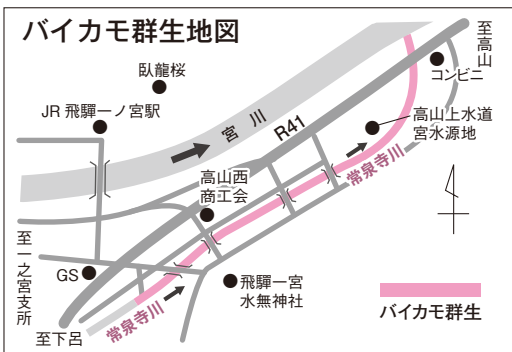
●一之宮バイカモを守る会(一之宮町)



復活したバイカモ(梅花藻)

川の瀬に なびく玉藻を
手にまかむ 春の若菜の
なびく玉藻を
文豪島崎藤村の父である
正樹は、明治時代に飛騨一
宮水無神社の宮司を務めて
いたころ、バイカモにふれ、
前出の歌を詠みました。
このように、古くから地
域の変わらぬ景色の一つで
あったバイカモは、位山に
源を発する常泉寺川の、水
無神社付近から宮川に合流

するまでの約500mの間
に見られ、6月から9月に
かけて水中や水面で白い花
を咲かせます。
バイカモの生育条件であ
る清らかな水と安定した湧
水に恵まれた同所では、神
通川流域最上流のバイカモ
群生地を観察することがで
きます。
バイカモを復活させたい
この群生地は、平成16年
の台風23号で一度はほぼ全



滅してしまいましたが、わ
ずかに残っていたバイカモ
を小島光政さん(一之宮バ
イカモを守る会・会長)が
見つけ、復活させようと移
植を始めたのです。
「最初は、地元の人々は
金魚草(バイカモの地方名)
なんかを移植して、と冷や
かな思いがあったかもしれ
ない」と小島さんは当時を
振り返りました。つまりバ
イカモは、川面を流れるゴ
ミや落ち葉がからまる、見
栄えの悪い雑草扱いだった
からでした。

源流の里のシンボルを復
活させようと、小島さんは
寒い冬も川に入り、水温調
査とバイカモの移植を続け
ました。移植したバイカモ
の数はなんと200カ所に
も及びます。
広がる協力者
いつしか、地元の人が一
人、また一人と小島さんの
思いに心動かされ、川のゴ
ミ拾いや外来植物の除去な
ど環境の整備に立ち上がり
ました。
「地元みんなが川に目
を向け、気持ちが高まっ
たことが本当にうれしかっ
た。」



流域住民が一丸となって
群生地を環境整備する

会員数は流域の住民73
人。一丸となって、清流のシ
ンボルを守り育んでいます。
抱負について小島さんは
「復活したバイカモと、常
泉寺川の川岸に植えてある



バイカモが繁茂する川面を見つめる小島さん

シバザクラが名所になれ
ば。みんなの思いがますます
す広がってくれば」と語
りました。
源流の里であるからこ
そ、清き流れのシンボルと
なっているバイカモ。小島
さんの見つめる常泉寺川に
は、復活したバイカモが川
面になびき、可憐な花を咲
かせています。

市では、一之宮地域の
桜とバイカモ、荘川地域
のササユリといった、地
域固有の自然環境を保全
するために、自主的な取
組みをする団体の活動を
支援しています。

問合せ先

一之宮支所農産課
53-2211